第 176 話＜支援者群像＞の要約と参考資料

第 176 話＜支援者群像＞の要約

土呂久公害の被害者を 20 年以上支援し続けた都市の人たちは、土呂久の何に魅了されたのか？　美しい谷間の集落への憧憬、無知だったことへの懺悔、修練の道場、都市と山間地の融合……。「記録・土呂久」の執筆者 12 人をとりあげた新聞連載から探ってみます。

第 176 話＜支援者群像＞の参考資料

１７６－１朝日新聞延岡支局北野隆一執筆の連載「記録・土呂久を語る－支援者たちの 22 年－」（93 年 5 月）より

第 1 回「運動」川原一之さん

「土呂久は、記録されることを求めていた、と思うんだ。村のど真ん中に鉱山があり、周囲に猛毒をまいたこと、埋められた被害が半世紀たって発見されたこと。土呂久の被害のすさまじさは稀有のもので、だれかが書きとどめて広く知らせねばいけなかった。ぼくは主体的に土呂久に来た、というより、地の神にとりつかれ、何ものかに引き戻された、という感じがするんだよな。当時だれもいなかったんだよ、記録者が」

第 2 回「裁判」加藤満生さん

「みぞれの降る寒い日だった。歯の根をガチガチいわせながら現場を見て歩きました。亜ヒ酸を焼いた登り窯の跡もそっくり残っており、まあ何とも凄惨な感じがしましたよ」

「土呂久には、独特の『気』というか、人を引きつける魅力がある。不思議な力を持っているんですよ」

「土呂久の人たちは本当に純朴でね。県民性なのかな。黒木博知事（当時）が土呂久に来て『私にまかせてください』と頭を下げたというんで、すっかり信用しちゃった。しかし、その後の知事は、臭いものにふたをする態度で接した。知事の被害者への裏切りが、問題解決を遅らせた」

第 3 回「医学」横井英紀さん

「74 年の知事あっせんで問題は終わった、と思っていたので『これから提訴する』と聞き驚いて、訴訟決起集会に行きました。行くまではずいぶん迷ったんですよ。ぼくは逃げ足が遅いので、いったん運動にかかわると長引くだろうなあと思ったから……」

悩んでいる横井さんを、夫婦別姓の妻、渡辺紀美子さんが「やりたいことをやって、ス

カッとしたいい男になったら」と励ました。この言葉で、10 年かけて育てた会社をたたみ、土呂久の被害者の会の専従事務局長になる踏ん切りがついた。「自分の仕事には代わり（社員）がいたけど、土呂久には代わりがいなかった」

第 4 回「支援」田中初穂さん

田中さんは高千穂町出身。遠足で土呂久の谷を見下ろし、弁当を広げた少年時代。土呂久は医者だった祖父の往診先でもあった。だから被害が発覚したときは「被害のすさまじさと、自分の故郷なのに気づかなかったことに、二重のショックを受けました」

第 5 回「信仰」生熊来吉さん

1972 年初め。「社会に開かれた教会」の方針をいかに実現するか悩んでいた生熊さんは、土呂久や松尾の鉱毒事件の新聞記事に目を留めた。「鉱毒の被害者救済こそイエスへの愛の実践ではないか」。生熊さんは、土呂久と旧松尾鉱山の鉱毒被害者に会いに行き、被害者の語る惨状にショックを受けた。「巨大な手にわしづかみにされ、土呂久の谷に放り込まれた感じでした。それから、土呂久にすっかりつかりこんでしまった」

「娘が突然『大学をやめて結婚する。相手は慎市さん』というのには驚いた。幼いころ土呂久に連れて行ったこともあるが、まさか土呂久の青年と結婚するとは思わなかった。いままでは支援してきただけの立場だったが、これからは生熊の血が土呂久に流れて行くのかと思うと、感慨深いものがありました」

第 6 回「東京」対馬幸枝さん

「ロ伝　亜砒焼き谷」を読んで「土呂久」を知った。「不思議な魅力を持った本でした。ロ伝スタイルで、事実を私たちの目の高さで展開しているわけ。土呂久は規模が小さくて、公害問題のあらゆる面が、結晶体のようにわかりやすくまとまって見えたのね」

対馬さんは青森出身だが、故郷に帰る家はない。だから「土呂久は懐かしかった。ゆったりした時間の流れがあり、自分の子どものときの世界に入っていくような感じだった」。「土呂久公害を、私は自分の問題として考えたのね」と対馬さん。「まず土呂久で繰り広げられた不正への憤り。その不正を見過ごせば、自分もいつか同じ悲劇を味わうことになる、と思ったんですよ」

山並み、満天の星、茶摘み、たい肥背負い、田植え……。対馬さんの担当した章では、土呂久の自然や「農」の情景がしばしば描かれる。「コンクリートの中で暮らしていると、農業は魅力的。再生産、自然の恵み。土呂久で農業したい、ってあこがれますね。だって今、東京で土を見ること、できないんですよ」

第 7 回「交流」岩切裕さん

「被害者の交流の根幹にある心情は何か」を、岩切さんは考え続けた。そして「土呂久

のおばちゃんたちは、人に安心感を与える物腰を持っている。その心の根っこには『優しさ』があるんだ、とわかったとき『やさしさを心根に』という題が、自然に浮かんだというんです」

第 8 回「記者」荒武義夫さん

宮崎日日新聞本社を訪れた際、応対した記者が荒武さんにもらした「あの時は、新聞記者としてよりも一個の人間としての自覚が強かった」という言葉が、この章の題「記者としてより人間として」に生かされた。「記者のみなさんが口々に言うのは『土呂久の人たちは優しかった』ということです。その優しさにうたれた記者の方々自身、同じような優しさを持っている、と私は思いました」

第 9 回「写真」芥川仁さん

76 年ごろ、地区の人が「写真なんか撮っちょって、何でおれたちん苦しさがわかろうか。知りたいとなら百姓手伝いない」とからんできた。「やってやろうじゃねえか」とばかりに 77 年 1 月、家族を連れ 10 日間滞在。泊まり込みで農作業を手伝い、「いっきに親しくなった」。地区全戸で聞き取りをして、患者分布地図を作製した。

第 10 回「教育」橋口三夫さん

「運動が、授業になった」と橋口さん。「世の中の矛盾を感じて運動している私たちが、それを生徒に伝え、意識させる。子どもたちはすぐに変わることはなくても、不特定多数のなかからいつのまにか変わる子もいるかもしれない、と考えていました」

紙芝居「十連寺柿」を、橋口さんがいったん英訳。89 年の都城工高 3 年の英語の授業で、週 3 回、約 3 カ月かけて生徒に訳させた。「生徒の意識に『土呂久』をたたきつけたかった。外国語を通して何回も何回も読ませれば、それだけ生徒の心にも鮮明に残ると思ったんです。『十連寺柿』は、土呂久公害の経緯が簡単めいりょうにまとまっており、題材として入りやすかった」

第 11 回「文献」福崎享子さん

被害者の手記を読んで、その誠実さに感動した、という。「佐藤鶴江さんは、初めて来た人にもきちんと説明し、案内している。目がほとんど見えないのに、手紙もすごくきちんと書いている。佐藤仲治さん（故人）は『（自分の代で）解決つかん時には、家族が闘ってくれる』と言う。こういう、運動と人の一生が重なった言葉と出合うと『すごいなあ』と思います。絶望したくなるような状況なのに、底の底では楽天的なんですよ。被害者に魅力があったから、支援者も集まったんじゃないかな」

第 12 回「総論」上野登さん

支援者たちに共通していた心情は「運動は、人のためではなく、自分のため」ということだった。「人のため自分をなげうち、自己犠牲的に献身するんでは、途中でへこたれてしまう。自分がやりたいときに『自分の人生でこれは避けて通れない』と、懸命にやる。何かの事情で運動できんようになっても、それはそれで仕方がない。いつか、みながそういう気持ちになっていた」